

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

| | |
|-------|--------------------------------|
| 施設名 | 太陽の子東五反田保育園 |
| 施設所在地 | 東京都品川区東五反田1-6-3 いちご東五反田ビル1階 |
| 法人名 | HITOWAキッズライフ株式会社 |

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「色」～街の彩りから自分だけの色、全身での表現へ～

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

当園は繁華街のビルの1階にあり自然に直接触れられる機会が限られている為、室内環境を重視し、園内展示によって季節を感じられる工夫や子どもの興味に応じたカラフルな装飾を保育室に設置している。その中で子どもたちは身近にある色に関心を広げ、色の名前を覚えたり、制作活動を意欲的に楽しむ姿が見られていることから、この興味をさらに広げ、様々な色の種類や変化、組み合わせ、自由な表現を体験することで一人ひとりの探求心を育てていきたいと考え、テーマを「色」に設定した。

2. 活動スケジュール

○9月「色との出会いと街の色の発見」

- ・色に関する絵本を複数冊導入
- ・戸外活動の中で"街にあふれる色探し"

○10月「好きな色を探求し、表現する」

- ・絵の具、マーカー、クレヨンを購入
- ・制作活動を通して自分の好きな色を自由に表現
- 【アート教室】好きな色を選んでキャンパスに描こう（2歳児10月23日、1歳児10月24日）

○11月「季節の色の探求と身につける色」

- ・"秋の色を見つける"をテーマに自然界の色へ視点を移す
- ・絵の具を使用した紅葉の色付け（1歳児）、クレヨンを使用したフロタージュ（2歳児）
- 【アート教室】自分だけの色でオリジナルアイテムを作ろう（2歳児11月20日、1歳児11月21日）

○12月/1月「色に触れる、手足を使って表現を楽しむ」

- ・視覚的な探究から触覚へのアプローチへ
- 【アート教室】冬の景色のフィンガーペインティング（2歳児12月18日、1歳児12月19日）
- 【アート教室】フットペインティング（2歳児1月22日、1歳児1月23日）

○2月「保育室をキャンパスに」

- ・保育室の柱を活用したアート活動
- ・色とりどりのマグネットを自由に貼り合わせて「自分の色・好きなモノ」を表現

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

○絵本設置

- ・色に関する絵本を子どもが自由に手に取りいつでも見られるよう保育室に設置。
- ・保育者との読み合いの時間に色の絵本を多く取り入れ、日常的に色に触れる時間を多く確保。

○クレヨン、ポンポンマーカー、絵の具、スモッグ

- ・保育室に設置し、子どもが好きな時に色を使った表現遊びを楽しめる環境を設定。
- ・汚れを気にする子どももいることから、スモッグを着ることで衣服への汚れを気にせず思い切り表現を楽しめるよう配慮。

○アート教室講師料、アート教材

- ・専門性の高い外部講師を招き、継続的にアート活動に取り組むことで子どもたちの色への興味関心と自由な表現力を育む。
- ・色を用いた制作活動において本物の素材に触れる機会を提供。

○保育室内にホワイトボードクロスを設置

- ・柱の表面を磁力のあるクロスに貼り替え、子どもたちのアート作品を常に掲示できる環境を用意。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

○9月

・**保育活動「街にある色探し」**

絵本で興味を広げた後、散歩中に看板、自販機、標識等"街の色"（人工的な色）を探す活動を実施。
室内では毎週テーマカラーを設定し、壁面装飾を一色で統一。同じ色にも様々な種類があることを子ども自身で気づくきっかけを用意。

○10月

・**保育活動「ハロウィン制作」**

多くの絵の具から"自分の好きな色"を選び、思い思いの飾り付けを作成。壁面に飾り、互いの色を認め合う空間を醸成。

・**アート教室「好きな色を選んでキャンパスに描こう」**

本格的な白いキャンパスを用意し、一人ひとりが選んだ"好きな色"で自由な描画を実施。
紙とは違うキャンパスの質感や、色が乗っていく重厚感を感じながら、"自分だけのアート"に向き合う没頭の時間を保障。

○11月

・**保育活動「秋の色探しと自分の色」**

散歩で落ち葉などのアースカラーに触れる機会を提供し、人工的な色（街）と自然の色の違いや多様さを発見する探究活動を実践。

真っ白なペーパーに絵の具を垂らし自分だけの紅葉を表現。拾った落ち葉を使用しフロッタージュの体験。

・**アート教室「自分だけの色でオリジナルアイテムを作ろう」**

自分の好きな色を自由に使い、オリジナルTシャツ作り（1歳児）、オリジナルシューズ作り（2歳児）を実施。

○12月

・**アート教室「冬の景色のフィンガーペインティング」**

黒い模造紙にのせた色を指や手のひらで自由に伸ばし、絵の具の冷たさや感触を全身で感じながら冬の景色をダイナミックに表現。

○1月

・**アート教室「初めてのフットペインティング」**

大きな白い模造紙の上にのせた絵の具を足の裏で踏みつけながら色を広げる。絵の具の感触を足の裏で感じながら、伸ばしたり足踏みをしたり自由な表現で色を楽しむ。

○2月

・**保育活動「保育室をキャンパスにして楽しむ」**

保育室内にある柱に好きな色のマグネットを貼り付け、色の組み合わせや形作りを楽しむ。
個々の作品を常に掲示できる環境を用意し、友だちの「色」へ興味を広げたり、自由な発想、その日の気分によって日々異なる「色の表現」を尊重。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

○感性と発見

散歩へ出かける際、保育者が「今日は～色を見つけに行こう！」と提案すると、いつもと同じ散歩道にもたくさん色を発見した。その中で「赤見つけた!」「さっきの赤とはちょっと違うね」等、同じ色にも様々な種類や見え方があることに子ども自身が気づいた際は、それぞれの感性を尊重し「本当だ、こっちも赤色だね!」と一緒に発見を楽しむ姿勢を重視した。これにより、子どもたちは色に対する興味の高まりと同時に、多くの色の中で自分の好きな色を徐々に確立させていく様子が伺えた。

○自己肯定感と愛着〈アート教室の成果〉

10月のキャンバス画では、講師が「どの色が良い?」と尋ねるとほぼ全員の子が自分の好きな色を複数答える姿が見られた。色と色が混ざり合い、選んだ色が自らの手で別の色になっていく様子を目の当たりにすると「色が変わった!」と不思議さと楽しさを感じていた。

11月のオリジナルTシャツ・シューズ作りでは、「自分で色づけしたものを身につける」という喜びが大きく、着用すると友だちと見せ合うなど、モノへの愛着と自己肯定感の高まりが見られた。

○色の感触との出会い

子どもたちにとって初めてのフットペインティングでは躊躇する子の姿も見られたが、恐る恐る足の裏で絵の具を踏むと「冷たい」「気持ち悪い」等、感じたことを口に出しながら楽しむ姿に変わった。慣れてくると「滑るね!」「つるつるするね!」と絵の具の上で足が滑ることを発見していた。保育者が両手を支えるとスケートのように絵の具の上を滑り、自身の足の動きと同時に色が混ざり合う面白さを体感しながら全身を使って色の表現を楽しんでいた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

○専門家との連携による質の向上と保育の発展

・アート教室の実施によりキャンパスや布用絵の具等、日常保育で今まで揃えていなかった「本物の素材」に触れる機会を提供したことは、子どもたちの「やってみたい」という意欲を強く引き出すとともに一人ひとりのアート作品の質向上につながった。また、専門家によるダイナミックなアート活動は実際に経験してみると、保育者たちが今まで懸念していた汚れや準備等に対する不安を払拭し、日常の保育活動において新たな構想を描くきっかけとなった。

○保育者自身がモデルになることの重要性

・保育者自身が「汚れ」や「逸脱」を恐れず、一人の表現者として活動に没入することを重視した。例えば Tシャツ作りでは保育者も子どもたちと一緒に自身の好きな色を選び同じ工程で作品作りを行ったり、フットペインティングでは大人も裸足になって楽しむ姿（モデル）を示したことは、子どもの「汚してはいけない」というブレーキを外し、解放的な表現を引き出す最大の要因となった。また、どの活動においても保育者が子どもの発見と一緒に驚き、探求を楽しむ姿勢を保つとともに、子どもと対等な「共感者」として心から活動を楽しむことこそが、子どもの主体性を引き出す最も重要な関わりであると確信した。

○今後の展望

・発達の「定点観測」と継続的な比較検証

「色」の探究を単年度で終わらせず次年度も継続することで、長期的な視点での活動展開をねらいにする。特に現1歳児クラスにおいては、今年度の姿からの変容を比較・検証できる絶好の機会となる。同じ「色」という素材に対し、反応がどう複雑化したか、興味の対象がどう移行したかを記録し、個々の成長プロセスを追跡していく。

・今年度の成果として、外部講師による専門的なアプローチを入口にしながら子どもたち一人ひとりが「自分の色」を見出し自己肯定感を高めるプロセスが確認できた。今後はこの経験を基盤に外部講師に頼るだけでなく、保育者主導でアート活動を進めていくとともに、色から広がる他分野への展開も視野に入れ、子どもたちの主体的な探求心を継続的に支えていく。